

こう じょう せん き のう こう しん しょう
甲状腺機能亢進症って?

甲状腺から出るホルモンが過剰に分泌される病気。

代謝が異常に活発になり、食欲が増すなど、一見活発なので「よく食べるし元気そう」と、受診が遅れる傾向に。体内のエネルギー消費が異常に高まるせいで、進行すると心臓などに負担がかかり、命にかかります。

主な
症状

- 食欲が増すのに体重は減る
- 目がキラキラする(瞳孔が開く)
- 活発に動き回る、攻撃的になる
- 嘔吐・下痢をする など

甲状腺機能亢進症は新陳代謝が活発になるため、発症すると食欲旺盛になり、以前より食べる量が増えることも。

一気に大量のフードを食べると、消化が間に合わず、そのまま吐いてしまうこともありますので、その場合は食事の回数が1日3回なら、4~5回に増やして、1回に与えるフード量を減らしましょう。



原因

発症原因は不明です。さまざまな病気を併発するケースがあります。

猫の甲状腺機能亢進症は世界的に見ると地域差があり、日本のほか、ドイツやアメリカの発症率が高いというデータが。おそらく何らかの環境因子や、土壌も関係しているのでしょう。しかし、**病気のかかりやすさに猫種は関係なく、遺伝的な要素も影響していないといわれています。**甲状腺ホルモンが分泌され過ぎる要因として腫瘍が関係していることがありますが、根本的な原因は不明です。併発しやすい病気は多くあります。**慢性的な高血圧による心臓疾患をはじめ、腎臓病、網膜の問題など、さまざまな病気が見つかる可能性があるでしょう。**

治療法

まず薬や療法食による内科的な治療を行います。その場合、副作用が出るがありますが、多くは数カ月で効果が表れ、甲状腺ホルモンをコントロールすることができます。うまくコントロールできれば、長生きできる猫も少なくありません。手術で甲状腺を摘出すれば完治が望めますが、手術は一般的ではなく、それが最善の方法が検討する必要があります。手術を行う場合は、事前に検査して、心臓や腎臓などの機能に異常がないか調べます。健康状態に問題がなく、飼い主さんが望めば、高齢でも手術は可能です。術後は、甲状腺ホルモンを補うための投薬治療が必要になります。一般的に7~8才過ぎの猫がかかりやすいので、年に1回を目安に検査を受けておくと安心でしょう。



病気の治療を目的とした療法食は、動物病院で処方してもらいます。その際、1日のフードの適正給与量なども確認しておきましょう

雑誌「ねこのきもち」では、健康情報や困りごとなど飼い主さんの「知りたい!」を解決! ●こちらは、掲載した記事を再編集したものです。

アニコム損保ご契約者が
マイページから定期購読を申込みと

2号 (2ヶ月分) **無料!!**

